
SAO-SS 紅の死神

幸坂師宣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S A O - S S 紅の死神

【Nコード】

N 2 2 5 4 N

【作者名】

幸坂師宣

【あらすじ】

以前ワードギアのSSBBSに上げさせていただいていた作品を書きなおしながら投稿します。御多分に漏れず自分ルール（原作登場人物は極力出さず、あくまで本編の傍流で起こった出来事として書く。文体は原作に近づける等）に則った作品ですのでご了承下さい。感想等いただけると嬉しいです。それでは、何卒よしなにm（

ー）m

0

0

すべての元凶はあの男にあると言えた。

僕の従兄

岸田雅和とは、昔から割と親族同士の付き

合いがいいウチの家系に同年代で生まれていたこともあって長い仲だった。故に二〇十二年三月の末頃、彼が同じ市内の公立高校に進学することを知ったときは、驚いたと共に胸中に清水に一掴み落とした泥のようなわだかまりが沈殿した。それはそれまでの間薄い仕切で、しかし確かに隔てていた身内の関係と学校での事情との混濁を暗に指し示していたからだ。

入学式を終え、彼がよりによって同じクラスに在籍しているということを知ったときいよいよもってそれまで霞のように曖昧だった危惧がその輪郭を現し始めた。

予想に違わず入学しておよそ二週間前後で確立する分立した人間関係と不可視のヒエラルキーから、僕は完全に圏外の扱いとなっていた。誰の作為でもなく、完全に僕個人の問題である。

思えば人付き合いに対して「面倒くさい」という感情は中学時代から徐々に芽生え始めていた。相手の機嫌を極力損ねないように、言行の揺らぎを、表情の機微を、仔細に観察し、その上で大衆的に「良好」と呼ばれる関係を築き上げていく……馬鹿馬鹿しい、と感じるのにそれほど時間は必要なかった。一度その二ヒルな観念にとらわれると後はもう長年培われていた人間関係構築のセオリーは将棋倒しの如く次々と容易に瓦解していった。例えば自分がすべて“張りぼて”のように取り繕っていると感じるこの違和を相手も感じているなら、こんな茶番に身を踊らされるメリットがどこにあるのかと言いたくなる。

全てを取り払って本性本音を白日の下に曝しストレートに語り合えれば、それがこの反吐の出るようなオブラートの交換よりどんなにかマシだろうと何度も思うが、その都度この覆らざる厳然たるルールはもはやそんなことを許すほど柔なものではないと再認識し、思いとは裏腹に“張りぼて”に甘んじなければならぬ我が身を嘆いて鬱屈せざるを得ない。その中途半端なボーダーライン的立ち位置が、僕を圏外へと放逐する主な原因だった。

僕の危惧を具象化したのは今やお節介としか思えない雅和の行動だった。彼の主観から構築される世界は僕のそれよりは幾分か良心的だったらしく、機会を見つけては窓際一番後ろの席でくすぶっている僕に話しかけにくるのだった。そんなことに無駄な労力をつぎこむくらいならあそこでかたまっているクラスメイトの群れに混じって好感度を上げる努力でもしたらどうだと余程言ってやりたかったが、生憎と級友達が彼に対して持つパラメータは僕に時間を割いても大したダメージは無いくらいの余裕はあるらしかった。それに

なぜか、話題探しに実は苦勞しているのであろう彼が、なんとか僕を人間関係の輪に引きずり込もうと奮闘している姿は我が身のことながら見ていて面白かったし、いつもの“張りぼて”を感じなかった。それが長年の付き合い故に僕自身が言外に察することができているからなのか、彼の生来の性分であるのかは今もってよく分らない。

しかしながらそんな彼の人の知れず続く奮闘に対してすら、僕は全く人間関係に対する嫌悪ともつかない強硬な線引きを止める気は皆無だった。

そうして起き上がり小法師をノックアウトしようと試みるような不毛な戦いは半年に及び決着を見せることはなく、僕はますます心の押入の布団の中に深く深く身を埋め、彼はなんとか押入の引き戸を開けようと苦戦するばかりだった。

そんな折、彼がその日持ち込んだ話題がすべての引き金だった。秋も半ば、十月の風が吹き荒ぶ季節

「なあ柏木、>ソードアート・オンライン<って知ってるか？」

視界の右隅に表示されているイエローゾーンにまで割り込んだHPバーを確認しながら、そろそろきついかないと漠然と考える。

アインクラッド66層、攻略組最前線の迷宮区角である石灰窟のようなダンジョンで僕は7匹のデュエルガーと交戦中だった。ファンタジー小説に親しい者には灰色ドワーフの異名でも知られるそのモンスターは、全員一様に身長が低く、背は丸まっていて鈍色のざらざらとした肌はどこか岩肌めいたものを思わせる。ここまでの戦闘で察するにメイススキル600、といったところか。

上段水平を薙ぐヘビクラッグを前に踏み込みつつ僅かに身を屈めて危なげなくパライしながら、ふと「7人の小人」という眼前の光景から恐ろしくかけ離れたメルヘンなワードを頭の中でなぞり、黄緑色のエフェクト光が尾を引く下で場に似つかわしくない思い出し笑いをくすりと漏らした。それとは裏腹に体は半年間で培ったモーションを自然に繰り出していく。

この距離、タイミングなら決まると判断して僕は両手剣スキル上級剣技>スイフトレクタングル<を発動した。大小大小と続く四連撃はシステム面から言っても無理のある構成に思えることは否めないが、何より最終撃が小攻撃で硬直状態を最短に抑えられるのは大きかった。初撃を外せば一転致命的なミスとなり得るが、相手が与ダメージに重点を置いたスキル発動後で硬直状態に陥っている今ならその威力を余すところ無く発揮できる。

オレンジ色のエフェクト光が相手にスイッチの間も与えず四閃し、無慈悲にレッドゾーンに達したHPバーの残りドットをあつという間に食い潰す。耳障りな断末魔の叫びと共にデュエルガーの一体が

無機質なポリゴンとなって爆散した。

コンマ数秒の硬直状態を脱し、即座に前転する。直後、背後の地面で別のデュエルガーの黒ずんだメイスが紫色のエフェクトを散らした。一瞬《immortal object》の文字列が表示されるが、些末な視覚情報はすぐにアドレナリンに後押しされた戦闘^{ゲー}時高揚に塗りつぶされた。

残り六匹に減ったデュエルガーは前線に二匹を投入し、後方に控える四匹がサポート、状況に応じてスイッチするという戦法に切り替えてきた。ある程度のマージンをとっているとは言え、そろそろ回復アイテムを使用したい頃合いなのだが、前線の二匹が互いの硬直状態を補い合うようにして連続で繰り出してくる中攻撃がそれを許さなかった。HPの残量と相手のダメージから概算してあと四撃くらいなら余裕があるはずだが、そう考えている内にもゴツゴツしたメイスが僕の左肩を掠り、HPバーがわずかに減少した。いつそ先刻までのように全員で同時に襲いかかってくるようなスタイルであればまだ楽だったのだが。

やむを得ないと判断した僕が一気に片を付けるべく得物を逆手に持ち替えようとした、その時だった。

視界の右端から突然緑色のカーソルが飛び込んできた。プレイヤーだ。

そいつはシステムアシストで加速した僕の動体視力ですら補足困難なほどのスピードで背後に控える四匹のデュエルガーに向かって突撃していった。

とにかく速い。大方獲得したEXPのほとんど　　こと
によって全部　　を、敏捷度パラメータにつぎ込んでい
るのだろ。パールブルーの軌跡が一瞬走ったかと思うと、すでに
炸裂していた>ソニックリプ<がたまたま一直線上に並んでいた
三匹をまとめて両断した後だった。

わずかなタイムラグで連続して生じるポリゴンの破砕音をBGM
に、僕は持ち替えかけた得物を引き戻してメイスを紙一重で躲すと、

無理矢理肩から今し方メイスを振り抜いたデュエルガーに体当たりをかまし、後ろでスイッチに備えて今まさにスキルを発動しようとしていたもう一体に猛然と打ちかかった。

回転斬りの要領で放たれた>ラウンドアクセラレーション<の初撃が構えられたメイスを派手な火花のエフェクトと共に弾いた。筋力パラメータに上乗せされた武器のSTR値は相手のそれを辛うじて上回っていたようだ。二撃目の腰を落とし下から掬い上げるような斬撃がデュエルガーのガードを完全に上げる。とどめの三撃目は万歳の格好をしたままの相手の無防備に晒された胸に吸い込まれるようにヒットした。

確かな手応えと共にガラスをすりつぶすようなSEが鳴り響く。硬直状態に陥った僕の背後から残りの一体が襲いかかってきているのは分かっていた。

鈍重な衝撃を後頭部で受け止め、HPバーがぐんつと減少する。硬直状態解除直後の覚束ない動きで続く二撃目をパリイしようとした瞬間、目の前をあのペールブルーの閃光が走った。例のべらぼうに敏捷度パラメータの高いプレイヤーはとくに討ち漏らした一体を始末済みだったらしい。

あっさりと残りの一体が消滅すると、今し方放たれた>ヴォーパルストライク<の主はゆっくりと顔を上げた。

意外にも女性だった。見たところ年齢は僕とそれほど変わらないように思える。銀白色のウェーブがかったセミショートの髪が卵形の顔を縁取り、やや幼さを残す顔は整った目鼻立ちだった。オーシヤンブルーの瞳が全体的に白さを感じさせる彼女の外見によく栄えている。

先刻の一撃で無様に地面に膝をついていた僕は、得物に寄りかかるようにして立ち上がると口の中ではそばそと礼の言葉を呟きながら軽く会釈した。

「大丈夫？」

これまた白い柄に白銀の刀身を持つ優美な造形のショートソード

をぱちりと左腰に下げた白い鞘に収めながら、彼女は気遣わしげに言った。

「はい、一応イエローゾーンくらいの余裕は……あつたので」

言いながら左手の人差し指を軽く振って半透明のメニューウィンドウを呼び出す。アイテムメニューから「ハイ・ポジション」を選択し、ドラッグしてオブジェクト化した。

手近の折れた石柱の断面に腰掛けてポジションを煽っていると、隣に白い少女が腰掛けてきた。少女はエルゼと名乗った。

「それにしても危なかったわ……いくらマージンをとっていたからって最前線のモンスターをソロで七匹も相手取るのは無茶よ」

呆れたようにそう言うエルゼを横目に、実際エンカウント時には十五体という小群と呼んで差し支えない人数だったことをぼんやりと思い返すが、とりあえずそれに関しては口を噤んだまま僕は再度頭を下げた。

「助かりました……本当に」

「いえいえ。あなた、前線初心者？」

一瞬首を傾げたが、すぐに着実にレベルを上げて前線に参加しに来た中層クラスのプレイヤーであるかという質問だと思い当たった。僕の一瞬の逡巡をどう受け止めたものか、エルゼは僕が何か言う前に僕の手を握って言った。

「実はね、私 ニユーフェイス 私達も新参者なの。小さいギルドで今ま

で中層で頑張ってたんだけど、団長がメンバーの大体みんな下限のレベルには達しただろうって言って、上層に大移動するって決めてね」

生き生きとそうまくし立てると、「あ、そうだ」と彼女は澄んだ青い目で僕の顔をのぞき込んだ。

「あなたも新参者なら、私達のギルドに参加しない？ あなたさえ良ければ、なんだけど」

「えーと．．．．．」

喉から出掛かった「それはありがたいんだけど」という言葉をぐっと飲み込んだ。その後が続く言葉がどうしても相手を傷つけるか憤慨させるような気がしてならなかった。どうも僕は相手の気を悪くしないように申し出を断るのが昔から苦手だ。

結局僕が慎重に選定した言葉は、

「とりあえず、ギルドがどんな感じなのか、メンバーの人達に、会わせてくれない？」

だった。

言った直後に「承諾も辞退もせずに中途半端な状況に身を置くらいなと言っんじゃないかった」と五体投地して悶絶したい衝動に駆られたが、エルゼがそれを聞いて満足そうな表情をしたので寸前で踏みとどまった。

「そうね、いきなり入隊してというのも酷だったかしら。でもきつと気に入ると思う」

ふわっと微笑すると、エルゼは石柱からひよいと立ち上がった。

「そうと決まったら早速本部に顔見せに行きましょう。えーと．．．

．．．」

そう言いかけてちよつと困ったような顔をしたエルゼを見て、僕は状況を察して言った。

「ハルカ。ソロプレイヤー。よろしく」

「えーと改めまして、エルゼです。あ、フレンド登録してもいい？」

女の子の知り合いって、あんまりいなくてさ」

エルゼの所属するギルド>黄金の鍵<本部は、奇遇にも僕が居住している58層の主街区>セステシア<にあった。土地の半分を広大な湖が覆うこの層は多くの島々が点在し、その間を西欧風の橋やゴンドラが繋ぐという一風変わった造りになっていた。セステシアも御多分に漏れず、点在する島の中でも最大級のものに建設された

水の都となっている。

エルゼの先導で66層の転移門から58層に降り立った僕らは、当たり前障りのない会話をしながらセステシアへと向かっていた。主にエルゼがギルドであった出来事や攻略組への羨望と憧憬について語り、僕はその聞き役に徹していた。

「そう言えば気になってたんだけど．．．．．」

ゴンドラに揺られている途中エルゼがふと話題を変え、僕の隣に立てかけてある得物を指差した。

「ハルカの使っている武器って変わった形よね。初めて見た」

「ああ．．．．．」

僕はそつと得物の柄を撫でた。こいつに愛着を持ってもう半年になる。全長はおよそ僕の身長ほどはあり、黒い細長い柄に並行するように柄の先端の禍々しい円形の装飾から緩やかに湾曲した巨大な刃が伸びている。刃先は柄の反対側の位置にあった。刃の部分と峰の部分が色が逆転しており、黒い刃と白い峰が無機質な輝きを微かに放っている。一見して恐ろしく使い勝手の悪そうな大剣に見えた。

「>グリムリーパー<だよ」

「グリムリーパー？」

その不吉な響きに、エルゼが微かに眉根を寄せた。

>グリムリーパー<。死神の名を冠するこの武器は44層に稀に出現する同名のアンデッドモンスターがかなりの低確率でドロップするというレアアイテムである。種類は一応>クレイモア/ツールハインド<であり、その特異な形状から一時期レアアイテム蒐集家達がこぞって手に入れようとする「グリムリーパー狩り」が流行ったことがあった。しかしながら、いざ手にしてみると形状によるダメージ判定の複雑さや割に合わない要求STR値の高さから非常に使いにくく、結局手に入れたところで記念品として所持するだけであったり、換金アイテムとして重宝されるだけに止まった。

「名前に反して死神が持つてそうには見えないけど．．．．．」

怪訝そうな顔をするエルゼに、僕は無言でグリムリーパーを持ち

上げると、

「ちよつと見てて」

と僅かに彼女を牽制し、グリムリーパーを先刻デュエルガーとの戦闘で持っていたときは逆手に、つまり円形の装飾の方を上、刃先を下にして構えた。

と

突然バネ仕掛けのように刃が跳ね上がった。

「わっ」

エルゼが思わず声を上げる。

より正確に言えば湾曲した刃が円形の装飾を中心に四分の一回転し、全体的に柄に対して垂直の位置に移動したのだ。その姿はまるで

「大鎌？」

「そう」

素っ気なく言う刃を元の位置に“収納”する。

僕がグリムリーパーを元あった場所に置く間にエルゼは持論を展開した。

「その形状だと両手剣スキル発動の時に当たり判定が相当リーチの先端側に限定されるわよね。なるほど、さっきの戦闘中は収納形態で使ってたのはそれでか．．．．．スキルの特性上有利なのは持ち手から先端までの判定距離だから．．．．．うーん、それなら別の武器に買い換えた方がいいんじゃない？ 要求されるSTR値も馬鹿にならなそうだし．．．．．」

「やだ」

それだけは譲れなかった。

唐突に僕が我を通すような発言をしたからか、エルゼは少し驚いたような顔をしたが、すぐに「まあスタイル重視のプレイヤーもいるにはいるしね」と納得していた。

やがて、主街区の外壁が見えてきた。島、と言うよりその外観は寧ろ湖上に浮かぶ無数の西洋建築の群れだと形容した方が適切に思

える。石造りに使われているパステル調の淡い暖色系の色彩はいかにも牧歌的な雰囲気を感じ出しているが、それ以前にこの層は全体的にある種の静謐さを感じさせた。僕がここに居を構えることを決めたのも、この湖上のひっそりとした雰囲気が気に入ったからだ。

ゴンドラは街の外壁の水門から道路代わりに街の中をくまなく流れる水路に入った。広大な湖の景色から一転し、生活感溢れる石造りの街並みが僕らの眼前に開けた。エルゼがほう、と溜息を吐く。

僕も居を構えてからしばらくは彼女と同じような調子だった。荘厳さとも美麗さとも無縁の街並みだが、なぜかその光景は心の隅に忘れられたように転がっている根源的な郷愁の念をいたずらについついてくる。

石畳に舗装された歩道に着岸し、エルゼと僕は船頭役のNPCにめいめいコルを支払って本部に向かった。

僕は今更ながら本部へと向かう一歩ごとに頭を押し付ける加重が増えていくような錯覚を覚え始めていた。今からでも急用を思い出した、とでも言えばこの場合は逃げきれのではないかと頭の片隅で臆病な心が頭をもたげる一方、そんな行動力が僕にはないということとを痛いほど自覚していたし、大体にしてさっきのダンジョンで彼女とフレンド登録を済ませてしまっていたから今はともかく後々面倒なことになるだろうと思いついた。そう考え始めると、なぜあそこで流されるまま安易にフレンド登録などしてしまったのか……

．．．あそこですぐにあの場を後にしてからポーシオンを使っていれば……．．．出し惜しみせずにはさつとデュエルガーを片付けていれば……．．．．．そもそも狩り場を移していれば……．．．．．と取り留めもなく後悔と自責の念が押し寄せ、半ば上の空でエルゼの話に相槌を打ちながら歩き回って件の本部に到着したときは体感時間にして3分ほどしか経っていないように思われた。実際は15分程度歩き回っていたのだが。

「ようこそ。ここがギルド>黄金の鍵<本部、よ。まだちょっと狭いけど……．．．．．」

笑顔でエルゼが僕の方を振り返った。

見た目、洋風建築のアパートのように見えた。二階建てでどこか英国の学生寮を思わせる外観である。

「充分広いと思うけど．．．．．」

「んーん。実はギルドメンバー以外のプレイヤーともシェアしててね」

木製のドアをくぐってエントランスを抜け、談話室と思しき割と広い部屋に出た。部屋の奥に煉瓦造りの小さな暖炉が設えており、オーク材の長テーブルが三脚並んでいる。その奥に、若い男が一人座ってコーヒーを飲んでいた。葡萄茶を基調とした質素なデザインのプレートメイルを装備しており、ツンツンとした短髪は黄土色だった。新聞らしきデータペーパーを覗き込みながら時折唸っている姿は年齢とはかけ離れた親父臭さを漂わせている。顔はデータペーパーに隠れてあまりよく見えなかった。

「あ、団長」

エルゼの声に気付いたのか、「団長」と呼ばれた男が顔を上げた。

「おお．．．．．エルゼか。あれ？　可愛い子連れてんじゃん。」

どうした．．．．．」

「あ、はい。こちらハルカさんって言って、さっき．．．．．」

尻すばみに消えていった「団長」の言葉に続いてエルゼが口を開いた瞬間、僕は「団長」に向かって脱兎の如く駆け出していた。長テーブルの一脚に助走に任せて手をつき、筋力パラメータに物を言わせてそのまま腕力だけで三脚のテーブルを跳び越える。あんぐりと口を開けた「団長」の顔が見えるやいなや空中にも関わらずその位置から強烈な跳び蹴りを食らわせた。まともに当たっていればHPの三割くらいは根こそぎ持っていくくらいの威力を込めたつもりだったのだが、予想したとおり犯罪防止コードの紫色の光に阻まれる。

「わ

！！！！！！！」

と二つ以上の事実に対して悲鳴を上げながら勢い良く尻餅をつい

た「団長」を、長テーブルの上に難なく着地していた僕は襟首をつかんで半ば引きずるようにし、強引に部屋向かいの扉から廊下に連れ出していった。

後に残されたエルゼは何が起きたか分からなかったに違いない。壁に叩きつけるようにしてそいつを立たせる。

「で．．．．．何で君がここで出てくるんだ岸　　グレ
イサム」

「は．．．．．はは．．．．．ひ、ひっさしぶり．．．．．
．．．．．達者そうで何よりだよ柏　　もといハルカ」

へらへらと引きつった笑みを浮かべるそいつこそが、僕をこの出口のない地獄に導いた張本人　　岸田雅和／グレイサムだった。

「同じ年頃の女の子侍らせてギルドマスター気取りか。なあ？」

「いやー相変わらず舌鋒冴え渡るようで」

軽口を叩きながら、グレイサムは僕の容貌をとくと眺めた。

「．．．．．しっかしお前、変わったなあ．．．．．一見して分からなかったぞ」

現在の僕の容姿は黒いローブに赤のセミロングヘアと紅色の目というものだった。エルゼもそうだが、SAOにログインしてから奇抜な髪型や髪の色にするプレイヤーはよく見かけた。その中でもそれが似合うか否かということになると今度はまた別の話になる。

「まあ、いいんじゃないの？　結構似合ってるぜ」

「．．．．．君も染めてるだろ」

本部に足を踏み入れて最初に聞いた「可愛い子連れてんじゃん」という言葉を思い出して今更若干頬が熱くなるのを押し隠すように僕が言うと、「お前と別れてからこっちも色々あったんだよ」と考えようによつてはあまり関係ない投げ遣りな返事を寄越された。

そう、以前僕は彼のギルドと一時期行動を共にしていた。あくまで『共にしていた』だけであつてギルドメンバーにはならなかったが、一緒にいた時期だけで言えば彼がギルドを結成する以前のからの

腐れ縁だった。GM茅場晶彦の、あの悪夢の宣告から

「それにしても今になってどうしたんだよ。よく考えたらフレンドリストにも登録させてくれなかったし、連絡づかなかったから結構みんな心配してたんだぜ」

グレイサムという言葉で過去に思いを馳せていた僕は現実引き戻された。

「こっちは寧ろ君に率いられてるギルドの方を心配してたけどね」

「いや心配して貰ってたのはいいんだが俺が聞きたいのは

いやちよつと待ったそりやどういう意味だお前」

「サーサライやパズは元気？」

僕が同行していた頃にギルドに加わった二人の名を挙げると、グレイサムの口元がほころんだ。

「ああ、パズは自室にいるな。サーサライは買い出しに行かせてる。二人ともお前を じゃない、話を逸らすなよハルカ」

心の中で軽く舌打ちしながら僕はグレイサムの頭一つ分高い位置にある視線を見返した。

「今日は何で来た？ エルゼと一緒にだったみたいだけど……………」
ははあ、もしかしてギルドに入れて下さいって？」

にやつと嬉しそうに笑うグレイサムを見て、僕は腹の底に黒い何かが渦巻くのをちら、と感じた。

「……………まああの子にはどんなギルドか見てから決める、とは言つてあるけど、ここはやめておく。大体何だ>黄金の鍵くつて」
「ああ、お前がその……………いなくなつて、から決まつたんだ。名前。グリム童話から取つたんだ と、今はどうでもいいなそんな話……………何だよお前、ちよつと期待しちやつただろ……………」

グレイサムが渋面を作つてみせた丁度その時、申し訳半分にドアが開いて「あの……………」とエルゼが心配そうに顔を覗かせた。

僕が何か言う前に、

「ああ、悪い。こいつ知り合いでさ。もしかしたら入ってくれるかもしれないから、もうちょっと待っててくれ」

とグレイサムが大声で勝手に言ったので、僕が反論する間もなくエルゼはぱつと顔を輝かせて、「じゃあ向こうで待ってます」と僕に一瞥をくれて引っ込んでしまった。

ドアが閉まる音の後に僕がグレイサムを睨みつけると彼は白々しい態度で、

「．．．．．で？　どうするのかなお前は．．．．．見たところエルゼはお前にウチに入って欲しがってるみたいだが．．．．．」

「．．．．．」

「断ったらあいつがっかりするだろうなあ．．．．．どうせなら仲良くしてもらったらどうだ。なあ？」

選択の余地はほとんど残されていなかったし、あの純粹な笑顔を裏切るような真似がどうしてもできなかった。

しばしの最後に足掻くような逡巡の後、僕は溜息を吐きながら言った。

「．．．．．分かったよ。以後よろしく『団長』」

目が覚めて最初に感じたのが、頬の下どこかよそよそしい枕の質感だった。清潔感のある白い寝具は簡素ながら真新しさがあり、僕はしばらくその質感に体を馴染ませるように身を横たえていたが、やがて起き上がって一つ伸びをした。ヘッドボードの上の窓から陽光が差し込んでいる。

見慣れない部屋の様子に少し戸惑ったが、昨夕あれからすぐに郊外の一軒家を引き払って本部の部屋に移ったことを思い出した。淡々と手続きを済ませて慣れた小さな家を後にする時は、約半年のこの家での生活もこんなもんで終わりかとちょっとした物足りなさを感じたが、別段振り返って感慨に耽るほどの思い入れもなかった。で引越は実に簡単に終わった。

ドアを軽くノックする音に気付いてメニューウィンドウを呼び出し、いつもの装備を着込む。来客に対して下着姿で応対に出るのは失礼かつ不用心極まりない。

ドアを開けるとエルゼだった。朝からキシリトールが10パーセントくらい入った笑顔は、冷水で顔を洗うより効果的に僕の頭をクリアにした。

「おはようございます!」

「.....おはよ」

目やになど付いているわけがないのだが、日常的な動作の染み込んだ癖で目元をこすりながら挨拶を返すと、エルゼは「朝食一緒に食べよ」と誘ってきた。それと共に彼女の背後にもう一人、女性が立っているのに気付く。

明らかに僕らよりも年上だ。濃紺色の背中まで届くロングヘアと

きりつとした目元が印象的な美人だった。彼女とはエルゼと出会うより以前に面識がある。

「お久しぶりです……サーサライさん」

「よっ、ハルカ」

大人っぽい外見に似合わず無邪気な口調でサーサライは片手を挙げた。当時のギルドでは女性性はサーサライと僕（と言ってても入隊していなかったが）の二人しかいなかったこともあって、ある程度彼女との親交はあった。

「ハルカって昔このギルドにいたんだってね。言ってくれば良かったのに」

「いや正確に言うとうってはいなかったんだけど……それ」
に当時ここ名前もなかったし」

こんな調子で軽く雑談しながら談話室に降りていくと、すでに長テールには先客が三人いた。一人はグレイサムで、昨日と同じような格好でコーヒーをしばきながらデーターパーに目を通している。リアルでもこんな調子で湯水の如くガバガバと飲んで腹を壊してトイレに駆け込むような奴だった。

こいつは世の中からカフェインが根絶したら中毒症状で死ぬんじゃないだろうか。

「いやあ、ここは腹下す心配もないからいいよなあ。やっぱ味だけはリアルにはだいいぶ劣るが」

「黙れ」

後の二人の内、がたいの良い男の方には見覚えがあった。やはりグレイサムがギルドを結成した初期の頃に入隊してきた槍使いのバズというやつで、この外見でリアルでは僕より年下だということのだから世の中広いものだと思う。彼は朝食の残りを掻き込むと僕に気付いたようで、無糖缶コーヒーのパッケージイラストに起用しても遜色ないような濃い顔をこっちに向けて鷹揚に手を振った。僕もつられて手を振り返す。

残りの一人は記憶にない顔だ。長めの黒髪と切れ長の目が特徴的

な男だった。背は高くもなく、低くもない。男は僕に気付くと、「ども、レンデルっす」と軽く頭を下げた。

僕らが席に着くとグレイサムが立ち上がった。

「よし、エイジアとブリンドーがまだ来てないが……まあ、あいつらはいつものことだな。ウチのギルドに新入りだ。一応知ってるやつの方が多いだろうが」

パズとサーサライが僕に目配せした。

「今日から正式にギルドの一員になるハルカだ。みんなよろしく頼む」

まばらだが心のこもった拍手がメンバーから響き、僕は気恥ずかしげな表情を隠すようにお辞儀した。というより俯いた。

「今日は三組に分かれて前線で各自レベル上げに努める。組分けはパズ、サーサライ、レンデル。俺、エイジア、ブリンドー。エルゼはハルカに同行」

「え？」

エルゼが驚いたような声をあげると、グレイサムはにやっと笑った。

「なんだ、女二人だけじゃ不安か？ 一応言っておくけどハルカは俺たちの数倍はつえーぞ」

「そうなの？」と首を傾げながらこっちを見るエルゼの視線を僕はあえて無視した。

九時に出発すると連絡してからグレイサムは上でまだ寝ているらしきメンバーの二人を叩き起こしに談話室を出ていった。僕とエルゼとサーサライの三人は雑談を交えながら朝食を取り始めた。僕は相変わらずほとんど聞き役に徹していたが。

「…………じゃあハルカはギルド結成の時から団長と一緒にだったんだ」

「まあそういうこと」

「二人とも昔っから仲良かったわよねえ」

サーサライが苦笑しながら口を挟む。

「それにしてもベータテスターの団長が『数倍は強い』って．．．
．ハルカつてもしかして攻略組だったの？」

「んー．．．．．ああ．．．．．いや、まあそう言えばそうかな」

現にボス戦には過去三回程度は参加したことがある。ただ、それで攻略組を名乗れるかというところほど攻略に対して積極的でないというのも確かだ。

グレイサムが執拗に僕にSAOを勧めてきたのは彼自身このVR MMOの世界を体感済みだったからだ。僕がゲームに対してはある程度興味を示すことを知っていたからこそ教えてくれたというのもあつたのだろうが、大部分は恐らくもつと僕に人と接して欲しかったからだつたのではないかと僕は睨んでいる。ベータテスターの大半がソロプレイでレベル上げに徹し、群を抜いた速度で攻略組に参加していく中、ある程度レベルが上がった後は低レベル層をギルドに引き込んで生き残る術を授ける彼のプレイは周りから見るとある意味奇異に映っているのかもしれない。

何もこんなデスゲームの中でまでお人好しである必要はないと思うのだが。

「ちなみに僕はベータテスターじゃないよ．．．．．あいつに鍛えられて今に至るってわけ」

「ふーん．．．．．でも一回別れたのよね？　として？」

エルゼが何気なくそう質問した瞬間、テーブル向こうのパスが紙コップをぐしゃっと握りつぶし、サーサライはサンドイッチを喉に詰まらせてむせ返り、二階から下りてくる途中だったグレイサムはどただだつと派手な音を立てて階段から落下してきた。

エルゼが目をはちくりさせていると、グレイサムが頭を掻きながら立ち上がった。

「いやーははは．．．．．その、色々あつたんだよ。色々と．．．
．．．」

「グレイ」

僕の抑揚のない声にぎくつとしたようにグレイサムは言葉を詰まらせたが、すぐに苦笑いすると「ま、そういうわけでき。気にしないでくれ」と逃げるようにそそくさとその場を後にした。

「そっちは相変わらずなのーお前」

僕がグリムリーパーをオブジェクト化するとグレイサムが呆れたように言った。

「．．．．ハルカってそんなに前からこれ使ってたんですか？」
「グリムリーパー狩りって流行っただろ。あれ、俺もハルカと行っただよ。こいつはそんなもん興味ないって言ってたけど」

現在僕らギルド>黄金の鍵くメンバーは前線に身を投じるべく転移門広場に集結しつつあった。すでにパズ組は一足先に飛んでおり、広場には僕とエルゼ、そして寝坊した二人が朝食を終えるのを待つグレイサムだけがいた。

「運良くドロップでゲットできたんだけど、あれ苦勞してゲットした割に本っ当に使いにくくてさ。んで妙に気に入りがるから無償でハルカに譲ってやったってわけ」

二人の会話を聞き流しながら僕はステータスを確認していた。準備が済み、いつでも行けるとエルゼに伝える。

出発間際にグレイサムが耳元に顔を寄せてきた。

「エルゼさ．．．．．やっぱりお前を除くと一番最近ギルドに入ってきてるから、実力的にメンバーに追いついてないの気にしてるっぽいんだ。若干焦ってるときがあるからよく面倒見てやってくれ。それと．．．．．」

グレイサムは眉間にしわを寄せたまま続けた。

「特に、迷宮区には近付かせないでくれな。あいつにはまだ早すぎる」

「え．．．．．？」

僕が何か言う前にエルゼが声をかけてきたので、仕方なく言葉の

意味を聞き返す前に転移門に入った。

とりあえず66層東の>イリスの森<でウェアウルフやドラंक
エイプを狩るのが適当だと判断し、僕らは66層主街区>レスハー
ヴ<を出て東に向かった。

道中出現するMobを撃退しながら進み、鬱蒼とした森の入り口
に着く頃には昼になっていた。

入る前に持参していた昼食の弁当を広げながら、僕はエルゼに気
になっていたことを尋ねた。

「あのさ」

「ん？」

「昨日会ったとき、迷宮区にいたよね？」

バスケットに入っていたホットドッグを頬張ったエルゼはそれを
聞いてふと真顔になった。

「……団長から何か言われた？」

正直グレイサムを裏切るような気がしてやや心苦しさを感じたが、
嘘をつく理由がなかったたので素直に頷いた。

エルゼはしばらく黙ってホットドッグを咀嚼していたが、やがて
上を向いてふーっと溜息を吐くと、

「うん、時々ね。ああやって秘密の自主トレしてるんだよね」

「一番最近ギルドに入ったから……」

「ん？ ああうん、一応それもあるよ。みんなの足引っ張りたくな
いしね。でも 一番の理由は、やっぱり」

不意にエルゼの顔がくしゃっと歪んだように見えたが、気のせい
だろうか。もう一度見直したとき、彼女はさっきと同じ弱々しい微
笑を浮かべていた。

「死ぬのが怖いから、かな」

死、か。

一番身近で最早日常の風景に溶け込んでいるようなものを自分か
ら切り離して改めて認識するのは奇妙な感じがした。

茅場によって死のルールが明らかにされたその時、>はじまりの

街く集まっていたプレイヤー達は大きく三種に分けられた。すなわち、恐慌をきたす者、何を言われているのか理解できなかった者、そして冷静に対処する者の三つ。僕はどれかという二三番目

死の意味が分からなかったと言うより、それをわざわざ言う必要性に対して疑問を抱いてしまった。日々を死んだように生きていた僕にとっては、自分が死んだ後の世界が容易に想像できたからかもしれない。

想像の中の世界は今までとほとんど何も変わらなかった。

僕一人世界から消えたところで何も意味はない。故に、このゲームにおける死は僕にとつてのこのゲームそのものの価値観に何ら影響を与えるものではなかった。

「．．．．．ごめん、なんか暗くなっちゃって。あ、このこと団長には内緒にしてくれる？」

僕が黙り込んだのを見て、エルゼが慌てたように言った。

「うん．．．．．黙っというてあげる、けど」

「？」

「もう許可無く迷宮区には行かないって約束して」

「え．．．．．」

「代わりに」

後で何でこんなことを言ったんだろうと僕は自分で首を傾げることになるが、この時はあまり考えが及ばなかった。ただ、彼女の姿勢に感化されてしまっていたのかもしれない。

「トレーニング、付き合ってあげるから」

エルゼは始め何を言われたのか分かっていないような顔をしていたが、やがて「ほんと！？　よろしくね！」と花が咲くように笑った。

自分の死に恐怖を持っているのに、その恐怖から逃げ出さずに乗り越えるための努力をしている。

それだけで、君は僕よりもずっと強いよ。

心の中でそんな言葉を付け加えると、僕は食べ終えた弁当を片付けて立ち上がった。

初めて会った時もそうだったし、今改めて見ても気付いたが、エルゼの戦闘スタイルは子供でも知ってるような単純な四文字に集約できた

要するに“一撃必殺”、である。

硬直状態中に受けるであろうダメージを考えず、与ダメージに主眼を置いた強攻撃を繰り返してまずHPを根こそぎ奪っていくスタイル。当然ながらパリイされたときの対応はほぼ何も考えておらず、僕は戦闘域から2メートルほど離れたところで腕組みをしながら彼女の>ヴォーパルストライク<が身長2メートル強のウェアウルフの肩口を逸れて虚しく空を切っていくのを見物していた。

「ちよつと、見てないで助けてよーっ!!」

ウェアウルフの拳闘スキル>エンゲージブロウ<で体をくの字に折り曲げてぶっ飛んだエルゼが半ベそをかきながら僕に向かって叫んだ。

「イエローゾーンまで削らなきゃスイッチしないって決めといただろ。ほら終撃回避して>ブロードアーク<」

エルゼは指示通りきこない動きで上段に向かって放たれた回し蹴りを体を低く屈めて回避すると、愛剣>コンヴィクター<を半身で構えて下級剣技>ブロードアーク<を発動した。せいぜい超基本技>ホリゾントアルアーク<に毛が生えた程度のやはり基本技で、ホリゾントアルアークよりはいくらか攻撃範囲が広がっているのが特徴である。

淡青色のエフェクト光が残像に変わる前に僕はさらに指示を与えた。

「振り抜いたら上段から>ラピッドハッシュ<、そのまま>ホリゾントアルスクエア<!」

相手のHPバーが三割減少するのも待たず、エルゼはすぐさま上

段から連続で浅い斬撃を繰り出す>ラピッドハッシュュくを発動し、
仰け反ったウエアウルフに向かって水平四連撃につなげようとした、
が
そこで大きくバランスを崩した。

「あ」

無駄撃ちとなったソードスキルの勢いで地面に転がったエルゼは
慌てて左手に装備した盾>プレシパイスクを構えた。

ウエアウルフの猛攻は三割ほどガードを抜けてエルゼのHPバー
を削った。ここが弱点なんだよなあ
下手に中抜けして

上級スキルに熟達してしまっているために、下中級スキルによる連
続技の組み立てに慣れていない。

僕は仕方なくエルゼに声をかけた。

「おい！ スイッチ」

ほっとしたようにエルゼは得意の敏捷度を生かしたフットワーク
で後方に跳んだ。その空間をウエアウルフの小剣スキル>バイセク
トスクラッチくが切り裂いた瞬間、僕は上段ダッシュ技>アバラン
シュくを無防備なウエアウルフの首筋に叩き込む。イエローゾーン
から一気にHPバーが端まで減少し、ポリゴンが爆散した。

「タイミングを見なきゃ。闇雲にスキルを発動させようとして動作
完了前に次の技を焦るからこうなる」

グリムリーパーをバトンのように手の中にくると二回転させ
て肩に担ぐと、僕はエルゼにハイ・ポジションを一本手渡した。

さっきのウエアウルフでこの森に入ってから八回目のエンカウン
トになる。小中攻撃の組み合わせを疎かにする傾向があったエルゼ
の剣法を矯正するためには、やはり練習に次ぐ練習で動作をしっか
り一から叩き込み、慣れさせる必要があった。最初からMobと戦
わせるのは性急すぎるかとも思ったが、前線間近のギルドの現状を
鑑みるとそうも言ってられない。仕方なく実戦で多少無理をして
も近道をしてもらう必要があった。

はひい、と手近な場所に腰を下ろし、息を吐きながらポーション
を一気に飲み干したエルゼは相当消耗しているようで、それもひと

えに僕の加減を知らないスパルタトレーニングの賜物であると言えるかもしれない。

「それでも上達はしてるよ。最初なんて二撃間を繋ぐこともできなかったじゃない」

「で．．．．．でも．．．．．これ、すごく難しい．．．．．」

「スキル発動後は無駄な力を入れずにシステムアシストに身を任せていればいい。アクションゲームっていうよりコマンド入力式の格ゲーだと思って．．．．．」

「うーん．．．．．ゲームなんかあんまりやったことないから．．．．．よく分かんない」

意外な一言に僕はグリムリーパーをもてあそぶ手を止めた。新機軸VRMMOに初日からログインする人間といえば重度のゲームマニアくらいしか思いつかなかったからだ。

気が付くと僕はプレイヤー間では暗黙の了解で禁忌^{タブー}とされているはずのリアルに関して彼女に尋ねていた。

「エルゼはどうしてSAOにログインしたの？」

エルゼはちよつと唇を噛んでしばらく逡巡するような素振りを見せた。やはりまずかったかな、と僕が後悔し始める頃に、彼女はぽつりぽつりと言葉を選ぶように語り始めた。

「．．．．．お父さんが《アーガス》の職員だね。お父さんはすごいゲーム好きで、よく私にも色々勧めてきたんだ．．．．．私はそれうざがったりしてさ。おかしいよね、普通逆なのに．．．．．それで、『今度のは本当にすごいぞ』って持ってきたのが．．．．．ナーヴギアだったんだ」

立っているのも何だったので隣に腰を下ろした。昨日初めて会ったときも彼女がこうして隣に座ってきたことを思い出す。

「あんまり『完璧な仮想世界』がどーの『VRMMOの最先端』がこーのとうるさいから試しに．．．．．と思ってね。運用開始日にちよつと覗くだけのつもりでログインしてみたら．．．．．ま

あ、こんな感じ」

「へえ」

エルゼの話を聞きながら、僕は同時に彼女が全てを話しているわけではないということにうつすらと感付いていた。多分、ここまですが歩み寄れる最大限のボーダーライン．．．．．。そこから先は、確かに他人を隔絶する障壁が存在するのだ。こんなに近くで会話しているにも関わらず、僕は本当のところリアルで隔たっている距離とそれほど変わらない距離感で接しているのかもしれない。

「ハル力は？」

「え？」

不意に話を振られてうろたえる。

「ハル力はどうしてSAOにログインしたの？」

「ああ．．．．．」

．．．．．まあ、これでイーヴンと言ったところか。

「その、もともとゲームは好きだったんだ。で、まあ．．．．．友人に、勧められてね」

友人、という響きに微かに胸の奥が疼いた。

「ふうん」とどこか釈然としない様子でエルゼが相づちを打った。多分僕も彼女の話を聞いた後はあんな様子だったのだろう。

そのまま二人で隣に座ったまま黙り込んだ。互いの間の僅かな隙間に妙に不透明な何かが少しずつわだかまるのを感じ、堪らず僕が何か声をかけようとした、その時だった。

さつと彼女の口元を手で覆うと、僕は半ば乱暴とも言えるような速度で彼女を茂みの向こうに押し込めた。僕も後に続き、驚いて何か言おうとする彼女の唇の辺りに人差し指を当てて「黙れ」と合図する。

数秒が過ぎ、やがて茂みの向こうから騒々しい声が聞こえてきた。十人前後と言ったところか。僕らの隠れている方へまっすぐ近付いてくるので、エルゼが不安げに僕の左腕にしがみついた。

こういつた場所で遭遇する複数人のプレイヤーは誰であれ、まず警戒すべきだ。僕が耳をそばだてると微かに会話の断片が聞き取れた。

「……………いつら……………額で１７万コルも……………
……………てたぜ。結構な利益になんだろ」

「バカか手前は。だか……………て何で見境無くズバズバ斬つ……………うかな……………女はやつてから……………」

物騒な単語と下卑た話し声から嫌な予感がした僕は、そつと茂みの葉の隙間から目を凝らして向こうの様子を覗き見た。派手な装備と悪趣味な装身具の男たちが群れている。その上に表示されるＨＰバー

軽く舌打ちをして目を逸らした。左腕はもうほとんど感覚がない。僕は乾いた唇をなめるとエルゼの耳元でほとんど唇を動かさずに囁いた。

「オレンジプレイヤーだ……………」

エルゼがぱつと口元を手で覆った。その両目が恐怖に見開かれる。犯罪者を示すオレンジ色のＨＰバーの集団は幸いにして今のところ僕達に気付いている様子はない。

しかしオレンジプレイヤーと言えば中層辺りを荒らし回っているのが一般的なはずだ……………前線で獲物を狙おうとしたところで、強力な攻略組プレイヤーに太刀打ちできるわけがないからだ。

唐突に現れた謎の危険分子に、僕らは長い間息を潜めて身を寄せ合っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2254n/>

SAO-SS 紅の死神

2010年10月8日13時08分発行